

京鹿子

京都府立総合資料館
京鹿子
京鹿子
京鹿子



12月号

豊 田 都 峰
漣響集 その十六

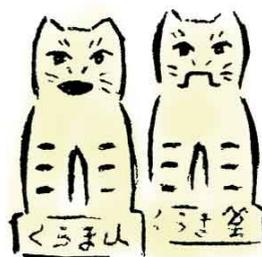
草の穂や山ふちどりを濃くひけり
沖晴れて葦高々と花穂をあぐ
隣家のくちなし数へあいさつす
くちなしの実いろの里のひぐれなる
黒ずみを濃くして愛宕秋深む
さそはれて穂すすきもまたさそひ風



しぐれ虹くぐりて越の国に入る
穂芒に北国の雲くづれぐせ
一葉落ちうしろすがたをうつ日暮れ
晩学や桜紅葉のひとひらも
秋風鈴なりてはふやす些事ばかり
蛇穴にその日の入日赤かりき
源流へこぼれてゐたり星月夜
冬めくや林たちまち日失ふ

文化の日 丸山佳子

早や十年ここにこの椅子文化の日
無にまさる冬将軍は今どこに
おのずから両手振れきて文化の日
ごめんなさい裸並木で欠伸して
見て聞いて人さし指の先に春



秀華採集

虫すだく電器まかせの皿洗ひ

森 茉莉

厨の仕事量の軽減はほんとうに革命的である。作品はその一例を表すが、その余白をすだく「虫」が埋めるのは安心である。余白が余白のままであつたり、よからぬ物が埋めるのが浮世か。

炎天を裏から剥す悉皆屋

佐藤 真隆

影もたぬかたちに置かれし秋扇

原田 俊子

悉皆とは洗張りなどをすること。表からだとどうにもならない炎天を、裏から一枚ずつ剥がすという発想は楽しい。後句は、これこそまさしく秋扇以外の何物でもない。

鈴鹿 仁

冬立つ

冬立てばきのふと違ふ雲流す

北よりの列車ごとごと冬連れて

紅葉散る信長と逢ふ墓閑か

系露忌二句

白露や兄のぬさうな森へゆく

序章かなほとけ道指す露しるべ

近 詠

和田 照海

雁来月

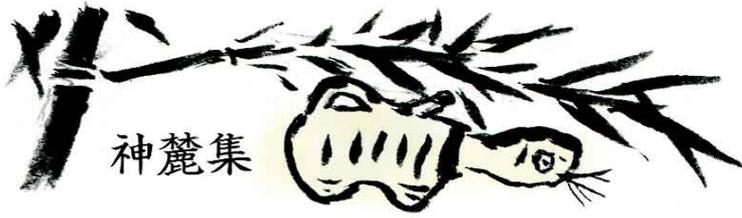
鞆ノ浦隠れ宿とや夜光虫

海酸漿ふふみ龍馬のかくれ宿

いろは丸遣ひの水母ふくらみ来

蛸壺にふたつの穴や雁来月

西日坂のぼり龍馬の護身銃



神麓集

狩獵法 林 日圓

鷺と鷹 猛禽つかふ狩獵法
鷹匠の技のかたちで百濟から
いざといふ時までトモゴ鷺の目に
鷺匠の腕から獲物もとめ翔つ
鷺翔んで青空覆ふ大つばさ

茄子の馬 北村 香朗

八月が最も重き月と想う
人生の重き八月巡り来し
きつちりと昼寝時間を織り込める
曾孫来て珍しがりぬ茄子の馬
迂闊にも今更徴に笑はるる

萩括る 藤岡 紫水

種満ちし温み掌にあり秋茄子
萩括るここは七卿落ちし宮
京舞はしづか秋灯華やかに
花持つがゆ糸のさびしさ秋の草
人形に有情の目鼻菊花展

松田 都青

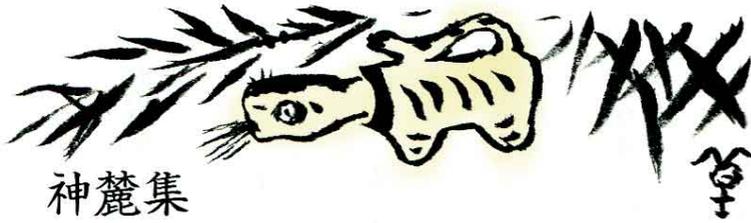
遠き嶺を涼しき距離で眺めぬる
八月は途中で止まる十五日
大將になれぬ酒なり濁り酒
焼けし田のどこからだつて雲が湧き

服部 郁史

燭に祈る爆忌よ反戦句は詠まぬ
母逝きて丹波が遠し盆の月
寂莫の広がる庭よ盆の月
残る夜は思惟か典雅か露の玉
雲灼ける今日一日を祈るのみ

船越 美喜

釣り橋を渡りしところ初紅葉
昏れ早し話のつきぬ友と居て
色づきし銀杏並木の山裾まで
星月夜遠く離れし友思ふ
逝きし友菊の香りに包まれて



神麓集

夏熾ん

丹生をだまき

辞書に無き若者コトバ夏熾ん
声にならぬ怒りを溜めて原爆忌
妖怪譚怖し聞きたし夕涼み
天罰かと思はず酷暑續きをり
キヨキヨと鳴き夜鷹の渡る漆闇

山田をがたま

秋めきて戸外の試歩を再開す
微熱とれ秋陽をうけて歩を運ぶ
露じめる土踏みしめて吾が身を鼓舞
秋の味覚ちりばめ誕生膳届く
明日香野の棚田を区切る曼珠沙華

としのくれ

竹貫示虹

生涯の岐路咄し合ふ楯明り
ふりむくと晩年そこに虎落笛
冬の月巨船は白き壁なせる
雪くるか金箔舞はす瓶の中
どの部屋にも亡き妻のゐるとしのくれ

薄月夜

北川孝子

ひと言の反芻ふゆる処暑曇り
出色一の語あたため薄月夜
五箇山の余情流して秋の蝶
逢へばすぐ幼なにかへる鳳仙花
秋暑なほ猫の目大きくなりしかな

芙蓉

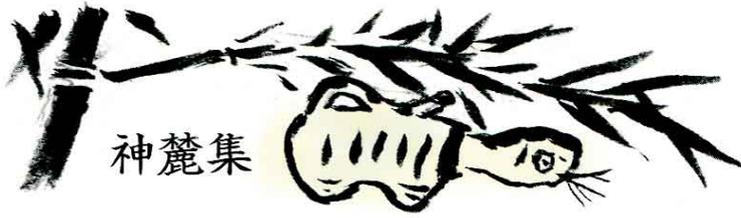
柴田朱美

刃こぼれのやうなる訣れ醉芙蓉
たましひを匿ふための白芙蓉
くるぶしの力を抜いて醉芙蓉
白芙蓉身を持ち崩すやうに散る
散りぎわに肉声放つ紅芙蓉

初もみぢ

伊藤希眸

円満を一つ加へて萩の月
空澄みぬ円盤投げの腕のびて
庭へきて円画くとんぼ見失ふ
母と子の円かな季を初もみぢ
円空佛刃き山里雁渡る



神麓集

燧道

丸井 巴水

石仏の裏より生まれ変はる蛇
冬眠に入るはず熊の撃たれたり
燧道の出口鏡の冷たさに
一声もおろそかにせず鶴迎へ
流れ雲鬼を閉ぢ込む紅葉山

とろろ汁

川崎光一郎

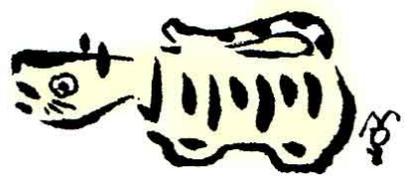
晩年は自然体なりとろろ汁
峡の空影が影追ひ鳥渡る
無住寺をほうし法師と法師蟬
鳴高音にはかに田園殺気だつ
名月も冥き海あり世の表裏

小堀

寛

あけぼのや南瓜はねむいかぼちやかな
炎屋やすずしき女三千両
少年の樹液は充てり八月十五日
大過去と小過去ならば端居かな
蝸や比叡越えれば京ことば





京鹿子集

豊田都峰選

虫すだく電器まかせの皿洗ひ

枚方 森 菜明

秋の暮夫のむかしと擦れ違ふ

秋扇遣り残し行くこと多し
萩の寺小路せばめし巾なりし

ちちろ鳴く壊れはじめた辺りより

爽やかにヒンドウの医師歩の早し

アヲチ 伊吹 之博

いわし雲家出ごころにひと日旅

会議終へ柔かなボスや秋の虹

炎天を裏から剥す悉皆屋

京都 佐藤 真隆

稲光実験室の技師と我

天の川さてさて登る梯子ない

秋の夜男料理はギリシヤ風

背泳ぎのへんないきもの裸虫

茗荷の子やつと花つけ食卓に

澁川 東 秋茄子

逆走の鼠火花やわはははは

鬼の子を見たし子等はいじめつ子

影もたぬかたちに置かれし秋扇

原田 俊子

蓑虫の雌があはれで句作なく

時刻む残片ひとつ秋扇

涼み台川の向かうは京料理